
立つ鳥跡を濁さず

中尾 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立つ鳥跡を濁さず

【Nコード】

N1383A

【作者名】

中尾 凜

【あらすじ】

私たちにも確かに、あの時代があった。思い出せばいつでもあの時間に帰れる。

LESSON・1

19**年。私は、いつもより、早く起きた。

もう、三月だというのに、外の空気はひんやり冷たい。暦の上では、もう春だというのに。

うーん、早いな・・・三年間は。

3月3日。女の子の日。桃の節句。

「うーん、今日はいいい天気になりそうだな」

私は、カーテンを開けて、空を見上げる。朝の冷たい空気のためか、空が物凄く蒼い。

まさに、澄み切った青空。

本日は、快晴なり！

「葉月、起きてるの？早いわね。ご飯、食べちゃいなさい」
下から、母の声が聞こえる。

「分かった。すぐ、行く」

「じゃ、用意してるからね」

私は、パジャマから、セーラー服に身を包む。

最後のセーラー服。

感慨深い。

「よし、下に行きますか！」

私は、身支度をして、御飯を食べに下へ降りた。

Lesson2・

「おはよう！ようちゃん、愛子、真弓」

私が、教室に着くと、もう仲良しの友達を着ていた。

いつも、遅い、ようちゃんまで。本名は、容子。

「おはよう。今朝も寒いね！！」

ようちゃんは、白い息を吐いていた。

いつも、明るいうちちゃん。

「はあ、私は、まだ、今日が、卒業式だなんて信じられない」
のんびり屋の愛子。

大きなため息を漏らす。愛子は三年間、髪を切らずに今は腰位までのびた。

「だね。私、今日、泣くかな？」

いつも、微笑みが絶やさない真弓。

というか、怒ったことがない。

「うーん、私は感激屋なので泣くかもしれない」

「あー、葉月はな泣きそうね」

「そいう、ようちゃんこそ」

私は、一応、ようちゃんに反論する。

だって、知っている。彼女が一番、泣き虫だということを。

「うるさい！」

と、思いつきり、ようちゃんは照れる。

こんな馬鹿な騒ぎを私たちは、教室で毎日していた。
卒業式が始まるまで。いつもと、かわりなく。

そして、時間はやってきた。

LESSON・3

体育館に、父兄がたくさんやってきていた。厳粛な空気。かなり、緊張した面持ちで卒業生たちは、音楽とともに入場してきた。私も、テンションが思いつきり、高くなったせいか、笑いがこぼれた。

「あんた、何笑ってんの？」

と、後ろにいた愛子に注意された。

「いやー。恥ずかしくて・・・」

「あー、ねー」

理解してくれた。

全員の入場が終わると、「卒業式」が始まった。

校長先生の話が終わり、卒業証書授与の番になる。

1組から、順に各生徒の名前が読み上げられていく。中には、緊張したり、感極まって泣き出す子もいた。それぞれに、想いがあるのだろう。

やがて、私たちのクラスの番。

「3年7組。相田真理子」

と私のクラスの子たちの名前が読み上げられていく。

「12番、小林容子」

「はい」

ようちゃんは、凜として、証書を受け取る。彼女は、県外の美大に進む。

ようちゃんの志望は画家なのだ。

「18番、佐伯真弓」

「はい」

真弓は、落ち着いた雰囲気で、証書を貰う。彼女は、看護学校に進学。

彼女なら、世間でいう「白衣の天使」になるだろう。彼女の笑顔はいつも優しいから。

きっと、素敵な看護婦になる。

「23番、中田愛子」

「はい」

以外なことに、愛子は少し手が震えていた。緊張しているのかな。

彼女は、県外の外語大学。超難関な四大に合格していた。

将来は、翻訳家になりたいという。

「28番、平井葉月」

いよいよ、私の番。

ごくりと唾を飲む。掌に冷や汗。いかん、緊張してきた。

でも、これで最後だから・・・私は、校長先生から証書を受け取る。

「おめでとう」

校長先生が、一言添えたくれた。

私は、頭を下げた。

私は、文学好きで、将来小説家になりたいがため、地元の大学に決まっていた。

そうして、卒業証書の授与が終了し、あっという間に、式は終了していった。

LESSON・4

教室の外では、みんながあっちこっちで泣いたり、笑ったりしている。

みんな凄くいい笑顔。優しい表情。

わたしたちも、互いに、写真を撮っていた。

「やっぱり、ようちゃん、泣いたね・・・」

私は、泣きはらして瞳が真っ赤になっている彼女を覗きこんだ。

「だって、葉月。在校生が歌う、仰げば尊しで感動しちゃって・・・」

「

「まだ、泣いてるよ・・・ようちゃん」

愛子がハンカチを渡す。愛子もつられて涙を流した。

「はい、はい二人とも。これが、最後じゃないのよ」

真弓が二人をなだめる。以外に、最後までしっかりしていたのは、彼女だった。

「葉月も何気に目が赤いよ」

「あはは。分かる？」

「何よー、あんたも人のこといえないじゃない!!」

ようちゃんが、私に叫ぶ。

だって、最後だよ。この制服着るの。この教室や、校舎に来るの。

そう思うと、さすがに、鈍い私でも、涙くらい流すさ!

真弓が、ふっと穏やかに笑った。

「でも、いつでも逢えるからね。私たち次第で・・・」

「確かに・・・」

私たちは、彼女の言葉に同意する。

今日が私たちの終わりでもあり、新たな始まりでもある。これから、長い人生何が待っているんだろう・・・

「さあ。最後に、四人で笑ってる写真とろう！」

さすが、ようちゃんが、その場を仕切った。

泣き笑いしながら・・・。

私たちは、最高の笑顔で、カメラに微笑んだ。

空は、本当に雲ひとつなく、真っ青だった。

LAST LESSON

今日も、いい天気だな。私は、真っ青な空の下にいた。散歩していたのだ。

「あー、早いね。あれから、10年か」

「そりゃね、あのようちゃんが結婚だからね。愛子なんて、アメリカに行ってるし」

横には、白い制服を着た真弓がいた。

今日は、私は、真弓が勤める病院に来ていた。

彼女は、今では立派な「白衣の天使」というか敏腕看護士になっていた。

「だよね。まさか、愛子が連絡なかったけれど、翻訳家になったはいいけれど、一番早く結婚してダンナアメリカ人よ！子供が二人目とか言ってたね」

のんびり屋の彼女が、一番、結婚が早かった。しかも、私らも最近、風の噂でそれを知った。

「ようちゃんも、大変だったよね。美術教師しながら、結婚するしないで何年揉めたっけ？」

「三年。彼女が一番、男苦手だったしね」

「だよね」

私と真弓は、顔を見合わせて笑う。

春の暖かい空気が気持ちいい。新緑の風が私たちをの間にすり抜けていく。

「葉月は、子供元気？本ももうすぐ、発売でしょ？ようちゃんの結婚式に合わせて、発売するんだっけ？」

「そう。ようちゃんやあんたたちにプレゼント。子供もダンナも元気よ」

「あんたも、ようやく、作家か・・・大変だったね、編集の仕事して、職場結婚して、子供育てながら、何回も色んなコンクールに出して・・・。デビューして、三年だっけ？」

「うん。あつという間でした」

そう、卒業してから私たちは色んなことがあった。

たくさんの、経験があつたから「今」があるのだと最近、しみじみ思う。

人はたくさんの「経験」をする。それが、大人になるための試練。

「真弓は結婚しないの？」

「うーん、仕事楽しいしね、きつくてやめたくなるときもあるけれど、やっぱり、やめられないし。焦ってないしね、したいときにするわ。独身生活も楽しみたいし」

真弓らしい。けれど、彼女がどれだけ辛い経験を経てきたかは、少しだけ知っている。

でも、彼女の笑顔は、本当に鮮やかに微笑んでいた。

私たちは、これから幾多の「経験」をしていくのだろう。

けれど、それは偶然でなく必然なのだと思う。

そして、一人じゃない。

「なんて、タイトルだっけ？本の題名・・・？」

「『立つ鳥跡を濁さず』」

「いいじゃない・・・みんな喜ぶわよ。高校時代の私たちでしょ？モデルは」

「そう」

真弓が、静に微笑む。私も微笑む。

「さて、仕事に戻らなきゃね。後輩が待ってるし・・・じゃ、結婚式でね」

「うん、またね。仕事、頑張って」

「お互いに」

真弓は、最高の笑顔で病院に戻っていく。

私も、彼女の後ろ姿を見送りながら、また、自分の日常にもどる。

私たちは、もう、あの頃には戻れないけれど。

新しい思い出を。一日を、生きていく。

「大好きな親友へ・・・この本を捧げます - 平井葉月・・・」

『立つ鳥跡を濁さず』

（ねえー将来、どうしてるかな・・・わたしら）

（さあ、ちゃんと生きてるわよ）

（だね）

（そうよ）

優しく、穏やか時間は、いつまでも。

本と私の記憶の中にある。どんなときも。

「立つ鳥跡を濁さず 平井葉月」

END

（後書き）

ご意見、ご感想お聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383a/>

立つ鳥跡を濁さず

2011年1月26日13時06分発行